

サハリン紀行



ほのほのとした

人情味あふれる

小林昭三

最近サハリン関連のニュースをよく目や耳にする。サハリンのコンスタンチンくんの火傷の治療を北海道でやった話。日本により戦中に強制徴用され、おきざりにされた四万人余のサハリンの朝鮮人をめぐる現地リポート。

さる六月二日から一週間の日程でそのサハリンを訪問して、現地のようにや暮しぶりをかいま見、純朴で底抜けに明るい人間味に触れることができた。

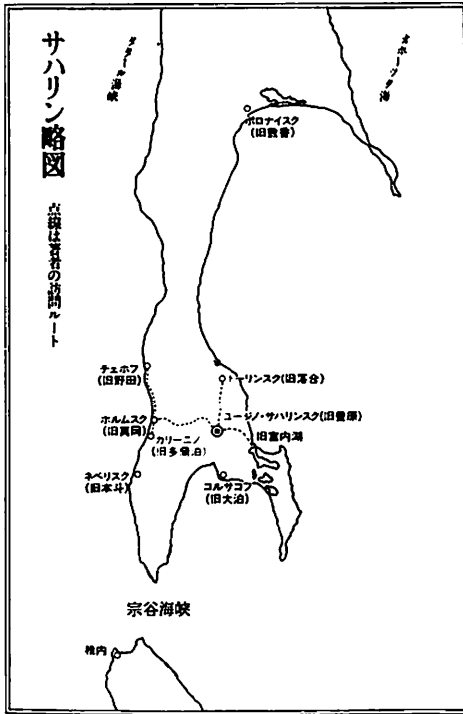
サハリンの初日

六月二日の真夜中の一時一〇分、予定どおりにハバロスクを小型のエアロフロート機で出発。エンジン関連のなにかのトラブルのため、滑走路上で全速力に至らないまま離陸を中止して、元の位置に引き返す。故障した計器を交換するなどの修理を完了して一時間後に再出発。東空の地平線のかすかな朝焼けを左手に見ながら、ユジノサハリンスク空港にちょうど一時間遅れ

で四時三〇分に到着。

ハバロフスクからは日本語の達者な金さんが同行してくれており、さらに、ユジノ空港にはユジノサハリンスク教育大学の英文科のバレンティナさん（以後、上手な英語で我々の面倒をみてくれる）、オスカーナさんが出迎えてくれた。この人たちが私たちの宿の出迎えなど一切の面倒を見てくれることになる。まだ、明けはじめの薄

明りの中、左手に線路を、間近に白樺の林を見ながら、二〇分程バスで行く。朝もやの中にぼおーっと白く見えるユジノサハリンスク教育大学の中央ビルの前に到着。その後一週間は、その建物の横にある大学寮とかなり離れたホテルとに、分散して泊まることになる。オスカーナさんの車で五分ちよっと走るとボストークホテルに到着する（五時半ごろ）。



季恢成著「サハリンの旅」(講談社文芸文庫)より

荷物をといて室内に出して整理すると急に眠くなり、数時間ベッドに横になり仮眠をとる。一〇時四〇分頃から、ホテルの前にある、ガガーリン公園を散歩する。土曜日の昼前で、家族づれがぼちぼち出歩いている。極東一の大きな公園であるとのことだけあって、さすがにスケールの大きな公園だ。しばらく行くと、リュックをかついだ日本人が挨拶してくる。こんなに早くこんなところで日本人に会うという印象。豪快な観覧車が、一人のおばさんに管理され、運転されている。大きい観覧車は一回ループル、回転する小さい乗り物は、〇・二から〇・三ループル。子供が管理する汽車の駅が奥の池のほとりにある。子供を沢山乗せて出発するところだ。きれいな池のそばにはテニスコートが二面あってゲーム中。

午後二時半には先ほど歩いたガガーリン公園の一角にあるレストラン・スポルトで私たちの一行一三人全員で昼食をとる。数日前に、名古屋から初め

てチャーター便でユジノサハリンスクにとんだという一行と同席する。向こうからわざわざ日本人の我々を見つけて話にくる。一五日からで明日には帰るとのこと。水産関係、農業その他の中小産業関連の民間の商用を兼ねたツアーであった。

五時過ぎに、朴・ジェコウ先生（ユジノ教育大）の研究室にて、今回世話をしていただき、一〇月には来日予定の方々と初顔合せをし、自己紹介や打ち合せをする。

夕方七時半から例の公園のレストラ・ン・スポーツで歓迎パーティをしていく。まだ日が高い（結構九時三〇分ぐらいでも明るい）が歓迎パーティが始まる。ウオッカとコニャックを飲んで親交を深める。隣の席は結婚式で盛り上がりがある。パーティが進むと、そのグループといつものまにか一緒になってダンスや歌を大いに楽しむことになってしまう。さらに、新たなグループからもさそいがかかり、久しぶりに、ダ

ンスで大汗をかく。バンドが日本人へのプレゼント演奏をする。なんと「恋のバカンス」のにぎやかな演奏！乾杯をなんどもくりかえし九時四五分ごろにレストランをでる。外で記念撮影をしていると、さきほどの新婚のカップルも我々に加わってくる。何度も記念写真を一緒にとる。みんな底抜けに明るい人たちだ。

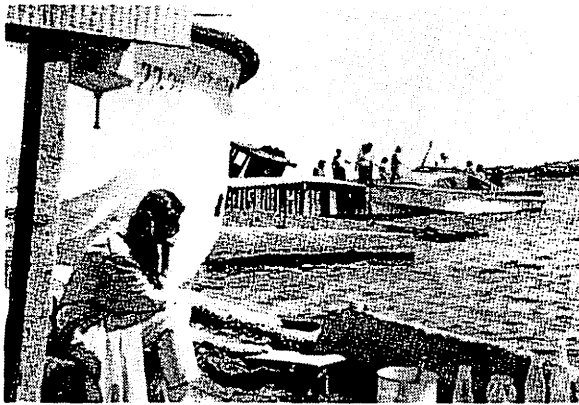
ユジノサハリンスク教育大学

サハリン州の人口は約七〇万人で現在は増加しつつあるとのこと。フリー市場等、他に先駆けて非常に自由な雰囲気となっているためらしい。二四日にはボリス・ミシコフ学長（数学）に会見する。その後、それぞれの専門の紹介、北方領土のこと、どんな専門の交流がしたいか等。

学長による大学の紹介によれば、一九五四年に設立され、現在六つの学部（自然科学部、物理数学部、歴史学部、ロシア語文学部、小学校部、工芸・手

工業部）で中学校教育の一一の専門をカバーすること。一学年あたり四五〇人の学生と一五〇人の通信教育生がいる。大学は二五の講座と二二〇人の教員からなり、三つの研究教育ビルと四つの学生寮を持つ。二〇〇〇人の学生の半分一〇〇〇人は寮に住み、残りの一〇〇〇人はユジノ在住というところらしい。大学での最高の給料で八〇〇ルーブル程度（普通で四〇〇ルーブル）。学生には生活費を一〇〇ルーブル支給される。ほとんどの学生は二〇歳ごろまでに結婚して子供も二〇歳ごろまでに結婚して子供も二人で二〇〇ルーブルあれば生活は何とかなる。但し、今年から学費は有料化（四年間で六〇〇〇ルーブル）。なんでも無料だと自分の生活に最低限必要なことしかやらなくなるといふ反省や、経済悪化からか？

大学の物理関係者とも懇談した。科学の教育、物理の教育の問題点など、多岐に渡って話がはずむ。ユジノ大か



らは、六、七人の教官が議論に参加してくれた。通訳は朝鮮人の金さんがやってくれて、非常に助かった。物理の教科書を多数いただく。コンピュータ通信の話もでた。ビットネットなどで近

い将来自由に連絡できるかどうか、等。ここのコンピュータ事情は非常に悪い。全学でヤマハハー○台とIBMPC数台だけ。

ツナイチャ(淡水湖)の一日

六月二三日(日)は朝七時半に起床して八時に朝食をホテル一階のレストランでとる。食券をみせると、バターと味噌様のものをつける黒パンとジャムをつけた薄焼きのようなものがでる。ユジノ教育大でみんなと合流し、バスでオホーツク海側のツナイチャという湖に行く。途中、両側に牧場が広がっている。自由市場が開かれていて、車で多くの人が来ていて大変なにぎわい。品物が板状の物の上に置かれている。広さは一五〇メートル四方ぐらいに見えた。帰り(五時すぎ)にはすでに終わっていて誰もいない空地になっていた。東に六〇キロぐらい行くと、ツナイチャにつく(長さ約四〇キロの湖)。海につながっている淡水湖で、水深は

それ程ない。白樺とモミの木の林に囲まれた美しい湖。

一九〇六年に日本軍とロシア軍の戦いがあった、地理に詳しい日本の作戦にロシア軍が大敗したという話を、朴先生が教えてくれる。海とこの湖がつながっていることを利用して(ロシア側はそれを知らなかった)、小舟でツナイチャを大きく回り込んでユジノ方面からのロシア軍を待ち伏せし、湖面がわから不意をついたという話。岸边には水藻が打ち寄せられ、厚い絨毯状に岸边を敷き詰めている。気温が低いので、腐ることがないためと思われる。海につながった方から、小さい遊覧船にのってぐるっと回りこみ、その昔日本兵が側面をついたと思われる辺りを湖面上からはるかに眺める。

体育のアナトリーさんが慣れた手つきでパーベキューの準備をする。みんなで囲んでするパーベキューとウォッカとコニヤックの味は格別だ。食後、バレー、バトミントン、ボート、散歩



や会話を楽しむ。心からうちとけて昔からの友人のように語り合う。

四時頃にもっとまわりの自然を見ておこうということで、バスにのって、出かける。船で眺めた対岸沿いに、こ

んどは陸路をバスで行く。小中高等学校の先生がたの休暇村というところに行く。東京オリンピックに向けて、ツィナイチャ（富内茶）と南方向の水路（二キロ）を共産国五カ国の合同練習場として、水路でつないで、最後の仕上げの猛練習をしたところ。そのため立派な施設、合宿所をつくった。その後、ユジノの第一書記が別荘として占拠し、密かに釣（いとう、ふな、ます、などが驚くほど豊富）やパーベキュー、テニス、サウナなどの最高のリゾート生活を楽しんだという。これが、明るみに出て問題となり失脚する。かくして、今は教師のリゾート地になったという次第。

サハリンの朝鮮人

ホテルの横の道路のむこうがわにある広場で、朝鮮族の五人のおばあさんが野菜、赤いカブ、ぜんまい、キムチなどを売っていて、その隣では、別な五人の婦人が花を売っている。最近、

よく日本人が来るらしく、すぐ日本語でおばあちゃんが話しかけて来た。花屋さんの方もきれいな日本語を話す。終戦時にサハリンに日本が置き去りにした朝鮮人の人たちだった。家では日本語をいつも話している人もいるという。みんな年金をもらっていて（サハリンでは五十歳になると百二十ルーブルの年金がでる）不自由はないが、こうして働くことがすきだという。バラの花を二人で二把（五〇ルーブル）買うことにした。

来るとき新潟から一緒だった美女の一人は、韓国の歌舞団の人達だった。飛行場の待合室で、賑やかに踊りの練習をし、歌を口ずさむ。どこで何をするかと聞くと、サハリンに招待されてコリアンのダンスを踊るのだとこやかに答えた。ゴルパチョフが韓国との国交を開いたので韓国から初めて訪問団が組織された。我々と同じ時期に、ユジノに滞在して、劇場で演舞を披露した。偶然サハリン駅前の店で再会し

たので、「花を買ったバザールで話して分かった情報だが、朝鮮人の人から彼女が大変歓迎され、期待されているそうだ」と伝えた。みんなですなおに喜んでいた。結局、帰りもずっと新潟まで一緒だった。ソウル―新潟―ハロフスク―サハリン―ハロフスク―新潟―ソウルのコースでこうした交流がされる。

ある夜、朴先生が大きなオホーツクの蟹とシャンパンを持ってホテルを訪ねてきてくれた。シャンパンを一緒に飲み、朝鮮人問題をきいた。彼はここで二五才まで帰国の迎えをまった。しかし、だれもこなかった。そこで、踏ん切りをつけて大学に入る勉強をする。ロシア語が一番大変で、試験を受けるため、七〇頁ぐらいのロシア語を丸暗記したという。こうして、モスコウ大学に無事入学し、優秀な成績で卒業する。やがて、ユジノ教育大学の教授になる（朝鮮人のなかでも数人しかいないようだ）。ただし、学位はなかなか

とらせてくれなかった。与えると朝鮮に帰ってしまうと思ったためらしい。今では彼は、教育大学を総合大学にするためがんばっている。東洋学部をつくり日本語、中国語、韓国語学科をつくりたいという。モスクワは賛成しているが、金がないから自分でやれという。そこで、東洋研究センターをつくり、この九月からは三カ月コース（二五〇〇ループル）のビジネス学校も始める。それをセンターの経費にあてるといふ。日本からもきて教えてもらいたいとのこと。

五〇年程の時を経て、ひどい苦労の後に、朝鮮人はしっかりとここに根を下ろしている。この人達の生活を大切に守り、戦時の人権侵害を二度と繰り返してはならない。

サハリンの学校とピオネールキャンプ

ソ連では義務教育は一年で九月から五月まで授業で、六、八月の夏休みは学校でやるような読み書き計算の勉

強はいっさいやらない。こどもは親から離れて、いくつかのピオネールキャンプで楽しい活動をして過ごす。そのキャンプの施設を六月二十五日に訪問した。若い女性主任と露の所長さんが我々



を歓迎してくれる。ひろびろとした施設だ。遊び場、スポーツ施設、プール、食堂、宿泊及び教室などが十分なスペースをもって配置されている。子供たちも我々を大歓迎してくれる。サハリンテレビも取材にきていた。学生たちは「たんぼのうた」を面白いフリ付けでやってみせ、ゆっくり、一小節ずつ子供達に教える。「花いちもんめ」に似た遊びをやっているグループもいる。指導員の多くは学生で、アルバイトを兼ねた実習にもなっている。

充実した付属の医療や治療、療養の施設を見学する。夏以外は、労働者の施設として多角的に使われる。マッサージ室やトレーニング室もある。山本さんも上半身の丁寧なマッサージをうける。運動器具を自由につかったりしてしばし休憩をとる。

サハリンにはこのようなピオネールキャンプが二〇カ所ぐらいあるという。最近では費用の一部が自己負担になり、子供を参加させられない家庭が出てき

て、子供が減って、閉鎖に追い込まれる施設も出始めているという。

人情味あるサハリンの暮し

以上、僅か一週間に満たないサハリン滞在にしては、かつてないほど新鮮でほのぼのとした人情味に溢れる体験ができた。二回も家庭に招かれ家族ぐるみの心のこもった歓待を受けた。どれも二DKぐらゐのアパートで、二〇年前と同じ建物にしては二〇年前の日本よりは進んだアパートだ。心のこもったおもしろいご馳走がつきつきと出されてきてとても物不足を感じさせない。しかし、相当前から準備してそろえたようでもある。一カ月に一本しか配給されないウオッカ、特製のそれ、コニャックなどで何度も何度も乾杯した。歌をうたいダンスをおどった。底抜けに人のよい明るい親切な人たちはかりだ。日本の学生も標準的なサハリンの学生の家が招待されて大いに楽しんだ。ソ連では闇の経済が拡大し、生産さ

れた物はすぐ闇に回ってしまふ。だから、コネとかがないと手に入らない。私にも普通の人の一カ月の給料相当のルーブルを支給されたが買いたいのものが見つかからないので三〇ルーブルもつかわなかった。市場の認識はほとんどない。ハバロスクなどでは円などの外貨がルーブルに代わって買物の主役だ。円がないと欲しいものが買えず、タクシーにも乗れない。円をたかる客がそこらじゅうに横行する。日本の農村が荒廃させられたように、日本が金権でこのサハリンの地を荒廃させる日が来ないように祈らざるを得ない。

(こぼやし あきぞう 新潟大学教育学部)

